

## 1. はじめに

中学生は、身体的にも心理的にも変化の大きな時期にあり、学校生活や日常生活の中で様々な不安・葛藤、悩みや困難を経験し、それらに立ち向かい乗り越えていくことで成長していく（庄司・杉本・五十嵐, 2010）。しかし、不安や悩みが解決されなかったり、折り合いがつかなかったりした場合は大きなストレスを抱え、心身の健康に影響が及ぶ恐れがある（伊藤, 1993）。また、不安や悩みの経験にもかかわらず、他者の援助が受けられない場合は、いじめや暴力など攻撃行動に至る可能性（湯川, 2005）が指摘されている。そのため、一人では解決できないような悩みに直面した場合、必要に応じて周囲に援助を求め、援助を受けることが必要となってくる。

中学生の相談対象には主に友人が選ばれているが、教師もまた中学生にとって有効な援助を提供できる立場にある（岩瀧・山崎, 2008）。しかし、実際の援助要請に関して、高木（1997）は、その実行に利益とコストが関連していることを指摘している。ここでの利益とは、援助要請を実行または回避をすることで生じるポジティブな結果であり、コストとは、援助要請の実行または回避をすることで生じるネガティブな結果である。永井・新井（2007）は、友人への相談行動の利益の予期が相談行動を促進させ、学校適応感を増大させることを指摘している。また、問題を抱えても、自分で解決できそうな場合は、援助要請行動がなされないことが示されている（高木, 1997）。そのため、相談経験を考慮しつつ、相談行動や相談行動の利益・コストを検討することが必要であると考えられる。

しかし、これまでの先行研究では、主な相談対象として友人や教師を想定しており、養護教諭を含めて検討したものは見当たらない。そこで、本研究では、第一に、中学生の教師への相談行動の利益・コストと、過去の悩みの相談経験の有無や、相談相手に対する期待感との関連を検討すること、第二に、それらが担任と養護教諭でどのような違いがあるのかを検討すること、第三に、それらが中学生の学校適応感とどのように関連しているのかを検討することを目的とする。

## 2. 研究方法

・対象…A 県 2 校の公立中学 1～3 年生 507 名（男 262 名・女 245 名）、B 県 1 校の公立中学 1～3 年生 323 名（男 153 名・女 170 名）を調査対象とし、有効回答者数 574 名、有効回答率は 69.2%であった。

・内容…

- 相談行動の利益・コスト：加茂田・秋光（2012）。「ポジティブな結果」「ネガティブな結果」「教師からの評価懸念」「相談における負担の大きさ」の 4 因子構造で、調査対象者の負担を考慮し、下位尺度ごとに因子負荷量が高かった 3～4 項目を抽出した合計 15 項目。確証的因子分析によって、原尺度と同構造であることを確認した（担任の場合  $GFI=.918$ ,  $AGFI=.883$ ,  $CFI=.949$ ,  $RMSEA=.080$ , 養護教諭の場合  $GFI=.913$ ,  $AGFI=.875$ ,  $CFI=.954$ ,  $RMSEA=.082$ ）。信頼性は、 $\alpha=.81\sim.94$ であることを確認した。
- 相談相手としての期待感：永井・新井（2005）を使用し、相談対象を担任と養護教諭に変更した。「心理・社会的問題」と「学習・進路的問題」の 2 因子構造で、7 項目。確証的因子分析によって、原尺度と同構造であることを確認した（担任の場合  $GFI=.883$ ,  $AGFI=.820$ ,  $CFI=.938$ ,  $RMSEA=.119$ , 養護教諭の場合  $GFI=.903$ ,  $AGFI=.852$ ,  $CFI=.961$ ,  $RMSEA=.105$ ）。信頼性は、 $\alpha=.92\sim.96$ であることを確認した。
- 過去の悩みの相談経験：永井・新井（2005）を使用し、相談対象を担任と養護教諭に変更した。「心理・社会的問題」と「学習・進路的問題」の 2 因子構造で、7 項目。「相談したことがある」「相談したいと思ったが、しなかった」「相談したことがない」「このことで悩んだことがない」という形式で尋ねた。
- 学校適応感：大久保（2005）。「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」「劣等感の無さ」の 4 因子構造で、調査対象者の負担を考慮し、下位尺度ごとに因子負荷量が高かった 4 項目を抽出した合計 16 項目。確証的因子分析によって、原尺度と同構造であることを確認した（ $GFI=.989$ ,  $AGFI=.944$ ,  $CFI=.978$ ,  $RMSEA=.101$ ）。信頼性は、 $\alpha=.82\sim.93$ であることを確認した。

- ・時期…平成 23 年 10 月下旬から 11 月中旬に実施された。
- ・手続き…学級単位で、担任教師の教示による無記名式、集団、自記式質問紙法で実施・回収した。

### 3. 結果および考察

#### (1) 担任と養護教諭の違い

相談行動の利益・コストと、相談相手としての期待感について担任と養護教諭の違いを検討するために、 $t$  検定を行った。その結果、相談行動の利益・コストに関して、担任よりも養護教諭に相談するときの方が、たくさんの人を巻き込んでしまう、親に連絡してしまう等の「ネガティブな結果」を感じにくいことを示した ( $t [573] = 4.34, p < .001$ )。このような結果となった背景として、学級担任に相談することへ抵抗や否定的な気持ちをもつ者がいること (神谷, 2009) や、成績や評価に関係しない養護教諭への相談のしやすさ (中山, 2003) から、担任には相談抵抗を抱きやすいため相談しにくく、養護教諭には安心感があるため相談しやすいのだと考えられる。

相談相手としての期待感に関して、「心理・社会的問題」 ( $t [573] = 3.29, p < .01$ ) と「学習・進路的問題」 ( $t [573] = 12.58, p < .001$ ) において、養護教諭より担任への期待感が高いという結果が示された。岩瀧 (2008) は、中学生が抱える悩みのうち、学習や進路や社会の問題では、養護教諭よりも担任が相談相手としてとらえられていることを明らかにしている。本研究においても、養護教諭より担任への期待感が高いという結果が示されており、先行研究を支持するものとなった。

#### (2) 過去の悩みの相談経験との関連

過去の悩みの相談経験について、「心理・社会的問題」「学習・進路的問題」の分類ごとに、悩み経験ありと答えた者のうち、半数よりも多くの項目で相談経験ありと答えた者を「悩みあり・相談あり群」、半数以上の項目で相談経験なしと答えた者を「悩みあり・相談なし群」とした。また、すべての項目について、悩み経験なしと答えた者を「悩みなし群」に群分けした。その上で、これらの群分けによる「相談行動の利益・コスト」「相談相手としての期待感」「学校適応感」の違いを検討するために、一要因分散分析を行った。

その結果、相談行動の利益・コストについては、「ポジティブな結果」では、多くの場合、「悩みあり・相談なし群」「悩みなし群」よりも「悩みあり・相談あり群」の方が高かった ( $F(2, 571) = 3.44 \sim 11.56, p < .05 \sim .001$ )。このことから、悩みを持ったときに担任や養護教諭に相談したことがある生徒は、実際に相談することでポジティブな結果が得られると考えていることが示唆される。一方、「ネガティブな結果」「評価懸念」「相談における負担の大きさ」では、多くの場合、「悩みなし群」よりも「悩みあり・相談あり群」「悩みあり・相談なし群」の方が高かった ( $F(2, 571) = 4.70 \sim 19.80, p < .05 \sim .001$ )。このことから、悩んだことのある生徒は、担任や養護教諭に対して、相談するとネガティブな結果や評価懸念がもたらされていると感じ、相談することによる負担の大きさを感じていると考えられる。

相談相手としての期待感については、ほとんどの場合、「悩みなし群」や「悩みあり・相談なし群」よりも「悩みあり・相談あり群」の方が高かった ( $F(2, 571) = 5.13 \sim 57.17, p < .01 \sim .001$ )。すなわち、悩みを持ったときに担任や養護教諭に相談したことがある生徒は、担任、養護教諭へ相談相手としての期待感が高いという結果が示された。担任や養護教諭に相談したことがない、また悩んだことがない生徒は、その不安によって相談相手としての期待感が低くなったと考えられる。

学校適応感については、多くの場合、「悩みなし群」が「悩みあり・相談あり群」「悩みあり・相談なし群」よりも学校適応感が高かった ( $F(2, 571) = 4.00 \sim 27.20, p < .05 \sim .001$ )。この点に関して、悩みを抱えずに生活できていることは、友人関係や学習面などがうまくいっており、学校に適応していると推測できる。また、「悩みあり・相談あり群」と「悩みあり・相談なし群」の比較では、「心理・社会的問題」の相談経験において、「悩みあり・相談あり群」よりも「悩みあり・相談なし群」の方が学校適応感の「劣等感の無さ」が高かった ( $F(2, 571) = 17.13 \sim 27.20, p < .01 \sim .001$ )。このことから、教師を頼って解決することよりも、自力で解決する方が周りに迷惑をかけず、劣等感を感じにくいといえる。さらに、「悩みあり・相談あり群」の学校適応がよいと示す結果は見出されなかった。この点に関して、「悩みあり・相談あり群」は、相談による利益もコストも強く感じていることが関与していると考えられる。

(3) 学校適応感との関連

1) 相談行動の利益・コストと学校適応感との関連

担任と養護教諭別に、相談行動の利益・コストを独立変数、学校適応感を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を実施したところ、Table1,2の結果が得られた。

「ポジティブな結果」が、学校適応感の「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼・受容感」に正の影響を与える背景として、担任または養護教諭に相談するとポジティブな結果があることを予測している生徒は、悩んだ際に相談できる相手がいるという安心感から「居心地の良さの感覚」、相談するとアドバイスがもらえて自分のためになると感じることから「課題・目的の存在」、信頼して相談できる相手がいることから「被信頼・受容感」の学校適応感が高くなるのではないかと考える。「相談における負担の大きさ」が、学校適応感の「居心地の良さの感覚」「被信頼・受容感」に負の影響を与える背景として、相談したくても、「教師と話をするのは緊張する」「うまく話せるか不安だ」という気持ちがあり、そうした相談時の負担感が、リラックスできずに「居心地の良さの感覚」に、人との関わりが苦手と感じ「被信頼・受容感」に負の影響を与え、学校不適応につながるのではないかと考えられる。「評価懸念」「ネガティブな結果」が、学校適応感の「劣等感の無さ」に負の影響を与えている点については、担任または養護教諭に相談すると「ダメな子だと思われる」「イメージが悪くなる」と感じやすいため、自己評価が低くなり、劣等感を感じやすいのではないかと考えられる。

さらに、養護教諭のみで、「ポジティブな結果」が、学校適応感の「劣等感の無さ」に正の影響を与える点に関しては、養護教諭に相談すると「受容してもらえる」というイメージ（今野, 2005）から、気持ちが楽になる、前向きな気持ちになれるといった「ポジティブな結果」を感じ、自己肯定感が高まり、劣等感の無さにつながると考えられる。

Table1 学校適応感と相談行動の利益コストとの関連（担任）

【利益・コスト】	【学校適応感】			
	居心地の良さの感覚	課題・目的の存在	被信頼感・受容感	劣等感の無さ
ポジティブな結果	.24 ***	.38 ***	.23 ***	.04
ネガティブな結果	-.03	-.09	.04	-.13 *
評価懸念	-.07	-.02	-.03	-.16 **
相談における負担の大きさ	-.19 ***	-.08	-.16 **	-.05
<i>adjR</i> <sup>2</sup>	.11 ***	.17 ***	.07 ***	.08 ***
			*** <i>p</i> <.001	** <i>p</i> <.01 * <i>p</i> <.05

Table2 学校適応感と相談行動の利益・コストとの関連（養護教諭）

【利益・コスト】	【学校適応感】			
	居心地の良さの感覚	課題・目的の存在	被信頼感・受容感	劣等感の無さ
ポジティブな結果	.21 ***	.32 ***	.18 ***	.08 *
ネガティブな結果	-.10	-.07	-.03	-.13 *
評価懸念	-.01	-.09	-.05	-.13 *
相談における負担の大きさ	-.16 **	-.06	-.11 *	-.04
<i>adjR</i> <sup>2</sup>	.08 ***	.12 ***	.05 ***	.07 ***
			*** <i>p</i> <.001	** <i>p</i> <.01 * <i>p</i> <.05

2) 相談相手としての期待感と学校適応感との関連

同様に、担任と養護教諭別に、相談相手としての期待感を独立変数、学校適応感を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を実施したところ、Table3,4の結果が得られた。

担任と養護教諭への「心理・社会的問題」の期待感が、学校適応感の「被信頼・受容感」に正の影響を示した背景として、自分の性格や外見、友人関係の悩みなど、中学生において教師への相談抵抗が高い（後藤・廣岡, 2005）とされる問題を話すことができる教師がいることで、安心した気持ちを抱き、「被信頼・受容感」が高くなると考えられる。

担任への「学習・進路的問題」の期待感が、学校適応感の「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」に正の影響を示した背景として、担任から学習面の適切なサポートを受けられることができると期待している生徒は、学習に関する悩みを一人で抱えなくてもいいという安心感が「居心地の良さの感覚」、自分のためになると感じる「課題・目的の存在」につながると考えられる。

一方、養護教諭への「心理・社会的問題」の期待感は、「課題・目的の存在」にも正の影響を示していた。

今野（2005）は、養護教諭に相談したときの対応として「一緒に考えてくれた」と答えた者が約6割存在していることを示していることから、養護教諭に相談すると、解決の方法と一緒に考えてくれ、悩んだときの解決方法を教えてくれるという期待があり、「課題・目的の存在」に正の影響を及ぼしたのではないかと考える。また、養護教諭への「学習・進路的問題」の期待感が、学校適応感の「被信頼・受容感」に負の影響を与えている背景には、成績や評価との関連が少ない養護教諭に、学習に関する悩みを相談したいと思っても、日常的に学習指導を行っていない養護教諭からは適切な支援が受けられないかもしれないという不安があるのではないかと考える。

Table3 相談相手としての期待感と学校適応感との関連（担任）

【期待感】	【学校適応感】			
	居心地の良さの感覚	課題・目的の存在	被信頼・受容感	劣等感の無さ
心理・社会的問題	.02	.10	.12 *	-.06
学習・進路的問題	.10 *	.11 *	.04	.08
<i>adjR<sup>2</sup></i>	.01 *	.03 ***	.02 **	.00

\*\*\*  $p < .001$     \*\*  $p < .01$     \*  $p < .05$

Table4 相談相手としての期待感と学校適応感との関連（養護教諭）

【期待感】	【学校適応感】			
	居心地の良さの感覚	課題・目的の存在	被信頼・受容感	劣等感の無さ
心理・社会的問題	.10	.18 **	.21 **	-.01
学習・進路的問題	-.07	-.12	-.13 *	.04
<i>adjR<sup>2</sup></i>	.00	.01 *	.02 **	-.00

\*\*  $p < .01$     \*  $p < .05$

#### 4. まとめ

本研究では、担任と養護教諭では、担任の方が相談相手としての期待感が高く、養護教諭の方が相談へのコストが低いなどの結果が得られた。さらに、相談による利益を感じ、相談への期待感が高いほど学校適応感が高いものの、実際の相談経験については、「悩みがない」者や「自力で解決する」者の学校適応感が高いことが示された。これらの結果を踏まえ、学校では、担任への相談コストを減らすことや、養護教諭が負担の高い生徒の相談を受けるといった役割分担を考えること、相談によって教師が問題解決するのではなく生徒自身での解決を促すこと、などの重要性が示唆された。

しかし、本研究では、養護教諭との接触頻度を考慮に入れた検討などいくつかの課題が見出された。

#### 【引用文献】

- 後藤安代・廣岡秀一 2005 中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」についての実態調査的研究 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 25, 77-84.
- 今野洋子 2005 養護教諭および保健室に関する研究（1）—大学生の持つ養護教諭と保健室の印象から— 北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要, 8, 251-266.
- 伊藤武樹 1993 悩みとその対処行動が中学生の健康レベルに及ぼす影響 学校保健研究, 35, 413-423.
- 岩瀧大樹 2008 中学生が抱える悩みおよび悩みに対する相談相手・相談抑制理由に関する研究—1 昭和女子大学大学院生活機構研究紀要, 17, 53-68.
- 岩瀧大樹・山崎洋史 2008 中学生への教育相談的援助サービスに関する研究—教師への援助要請スキルとパーソナリティとの関連 東京海洋大学研究報告, 4, 27-35.
- 神谷かつ江 2009 問題を抱えた生徒に対する対応 東海学院大学短期大学部紀要, 35, 25-32.
- 加茂田智子・秋光恵子 2012 中学生の教師に対する相談行動における利益とコスト—生徒の期待と教師の予測との比較— 学校教育研究, 24, 23-30.
- 永井智・新井邦二郎 2005 中学生用友人に対する相談行動尺度の作成 筑波大学心理学研究, 30, 73-80.
- 永井智・新井邦二郎 2007 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討 教育心理学研究, 55, 197-207.
- 中井大介・庄司一子 2009 中学生の教師に対する信頼感と過去の教師との関わり経験との関連 教育心理学研究, 57, 49-61.
- 中山巖 2003 学校教育相談心理学 北大路書房.
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 庄司一子・杉本希映・五十嵐哲也 2010 事例から学ぶ 児童・生徒への指導と援助 ナカニシヤ出版.
- 高木修 1997 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, 29, 1-21.
- 湯川進太郎 2005 攻撃・援助 唐沢かおり（編）社会心理学 朝倉書店 pp.111-122.